

令和3年度 現代陶芸美術館協議会(書面開催) 議事要旨

■ 意見聴取期間 : 令和3年7月13日～7月30日

■ 書面により意見聴取した委員

安藤(貴)委員、安藤(工)委員、加藤委員、神崎委員、鈴木委員、長谷川委員、古川委員、松原委員、山田委員、高橋委員、安藤(雅)委員、田代委員、樋口委員、加納委員、山口委員

■ 各委員からの主な御意見は以下のとおり

1. 令和2年度 事業報告について

(1) 資料1-1概要について 令和2年度の事業報告について

○平成14年に美術館は開館していますが、今後節目とする年度や文化事業などがありますか。(神崎委員)

【回答】

令和4年度が開館20周年にあたります。この年度の前半は空調・照明の改修工事で休館ですが、9月から開館20周年記念の企画展を開催する計画です。

また、多治見市で3年ごとに開催される国際陶磁器フェスティバル美濃の開催年度も、当館にとって節目となっており、フェスティバルに合せ大規模な企画展を開催する予定です。

○これまで教育普及活動に特に尽力してこられ、人的ネットワークの構築についても成果を上げてこられました。今後の展開の中で新たなターゲットの開拓や試みなど考えておられましたら、教えてください。

(神崎委員)

【回答】

新たなターゲットに関しては、来館者層に子どもや若者も増やしていきたいと考え、有効な催事(展覧会、教育普及催事など)や広報(SNSなど)を試みています。

また、陶芸ファンに限らず、より広い来館者層を開拓することも目指して、陶芸と近接ジャンルを内容とした展覧会も開催するようにしています(ガラス、テキスタイル等の工芸、インテリア等のデザイン、など)。この種の展覧会は来館者数の点でも好成績を出しています。

○地元の産業界との関係において、新たな試案などがあれば教えてください。(神崎委員)

【回答】

地元の産業界に関しては、陶磁器の素材業者やメーカーに、当館の催事への協力をお願いすることも、より積極的に行うようにしています(例え

ば、ワークショップ等で、素材や制作プロセスなどについての助言、協力など)。

- コロナ後になりますが、観光産業との連携などがあれば教えてください。
(神崎委員)

【回答】

学校の社会見学や修学旅行などのコースに当館の鑑賞プログラムを選択肢に入れていただけるよう、できることやよさを旅行会社等に周知しています。

また、東濃地域の観光誘客を目指した「東美濃歴史街道協議会」とも連携し、誘客の促進を図っています。

- 実用陶器、産業陶磁器の収集使命が特に素晴らしく思います。かつて大宅壮一が雑誌の図書館を作りました。それによって消耗品であった週刊誌、漫画雑誌も残り貴重な資料となっている。時代、技術の変遷を知る重要なアーカイブとなると思われます。(田代委員)

【回答】

セラミックパークの設立に際して、陶磁器産地にあつて産業と文化の両面を振興するという基本方針が立てられました。これを踏まえて、当館では作品収集と展覧会で実用陶磁器と産業陶磁器にも力を入れています。国内には8館ほど陶芸専門美術館がありますが、その中で実用陶磁器、産業陶磁器も収集している館は少数であり、この点が当館の特徴になっています。

- 令和2年度(この数年間)で陶磁器を通じた人的ネットワークをどのように構築されてきましたか。(樋口委員)

【回答】

陶磁器関係の人的ネットワークについては、広い視野では、開館以来、日本全国の陶芸界、さらには外国の陶芸界と、陶芸・陶磁器の調査研究、作品収集、展覧会等を通じて、関係者とのネットワークを構築してきました。具体例としては、国内の陶芸専門美術館8館で結成している「陶磁ネットワーク会議」への参加などがあります。

令和2年度を含むここ数年で特筆すべきこととしては、台湾の新北市立鶯歌陶瓷博物館との連携と、ここを通じての台湾の作家や教育機関等とのネットワーク構築があります。

- 地域との連携はどのようなことを実施されましたか。(樋口委員)

【回答】

地元地域における陶磁器の関係機関・関係者に対しては、開館以来、教育機関、ギャラリー、作家、企業などと連携を図ってきました。

具体的には、当館の催事(ワークショップなど)に地元の陶磁器関係者に協力いただいたり、地元の教育機関やギャラリーの活動(審査、講

演会など) に当館職員が協力等しています。

- コンセプトにある「愉しく陶芸に接することができる美術館活動を目指す」ことに対する評価の指標は何かありますか。観覧者数、コメント等あると思いますが、何をもって良しとするのか共通理解があると良い。(加納委員)

【回答】

その評価の指標として明確なものはありませんが、主にアンケートの集計における来館者のコメント集が、評価の基礎資料となっており、これを職員で情報共有しています。

展覧会に関しては、各企画展の館内評価を行っています。

このコンセプトの目標に向けて、魅力発信事業、展覧会、教育普及活動の具体的な事業展開を考えています。

- 地域や学校と連携を図り、出張授業や出前講座等どんどん取り入れるようになればお互いに良い。(山口委員)

(2) 令和2年度の事業報告について

- 4つの企画展はどれも興味深い展覧会でしたが、私は「ルート・ブリュック蝶の軌跡」展と「アンドリュー・ワイエスと丸沼芸術の森コレクション」展を観覧し、どちらも見終わった後、複数回訪れたいと思えるほど見応えのある展覧会でした。

「ルート・ブリュック」展は洗練された豊かな色彩に魅了され、展示の方法も変化に富んでいて作品を十分に引き立てていました。

「アンドリュー・ワイエス」展は絵画と陶芸、彫刻が展示されているのに新鮮さを感じ、違和感なく最後まで集中して鑑賞することができました。風の音や大地の匂いまで感じるようなタッチ、厳しい自然と向き合いながら暮らす人々、光と影が巧みに描かれているワイエスの絵画からは、その前から離れられないほど感動致しました。時間が許せば何度も足を運びたいと思ったほどです。(安藤委員)

【回答】

「アンドリュー・ワイエスと丸沼芸術の森コレクション」展は当館のオリジナル企画です。ルート・ブリュック展は巡回展ですが、展覧会の構成と出品内容は当館の学芸員が担当しています。当館では、学芸員が企画展の内容を作る自主企画展を重視しています。

- コロナ禍で展覧会、教育普及事業などは変更や現場判断の事案も多く、ご苦労の多いことだと思います。コロナが落ち着くまでは、まだしばらくかかると思いますが、よろしく願いいたします。(神崎委員)

○企画展、コレクション展については、貴館らしい内容で楽しませていただきました。また、アンドリュウ・ワイエスの登場には多くの人々の目が引き付けられました。それが入館者数にも反映されているようで、戦略としての効果も高かったと思います。個人的には「丸沼芸術の森」の紹介が興味深く、こうした芸術文化の支援活動を顕彰することも美術館の使命と考えます。(神崎委員)

○教育普及活動のなかで、これまでに高齢者や地元の産業界などを対象とした企画はありましたか。現在検討中のものも含め、教えてください。(神崎委員)

【回答】

地域のコミュニティーセンターの高齢者の講座(寿大学など)で出前講座を行いました。対象者ではありませんが、陶磁器製造会社の社員を造形講座の講師として招き、美濃焼の陶磁器製造を知ってもらい、製法を用いて参加者が制作できるイベントを企画しています。

○コロナ禍でもいろいろとワークショップや出前講座など、工夫して教育普及活動をされているのが感じられて、美術館の心意気を感じすごいと思いました。まだ、このような状況が続いていきそうなので、対策の上進めてほしいのと対策や工夫内容、逆にこの状況を活用した活動などあれば紹介してください。(長谷川委員)

【回答】

オンラインでできることを模索しています。これまでにオンラインで学校と結び授業を行ったり、造形講座、YouTubeチャンネルでの講演会やアートツアーなどを行いました。

コロナ禍が落ち着いても遠方の方や外出が困難な方に参加していただけるよう、美術館の活動を周知するきっかけになるために続けていきたいと考えています。

○一昨年度くらいから、友人など(美術、教育関係以外の方)を誘いやすい展覧会が多く、美術館はひとりで行くものと思っていた私のスタイルが変わりました。誘った方は初めて来館した人がほとんどで、作品と美術館に癒されたようです。

私も作品と作品周りのいろいろな事(作品とそれが求められた環境や美術コレクターの事)など勉強になりました。

また、友人に説明を求められてもわからないことばかりで新たな興味がわきはじめました。(長谷川委員)

【回答】

近年は陶芸に絵画などを組み合わせた展覧会や、陶芸以外のジャンル(日本画、ガラス工芸)の展覧会なども、以前より多く開催するようになっています。また、ポピュラーな展覧会を開催することも配慮してい

ます。アンケートからもこうした種類の展覧会を求める声が多く聞かれます。

- 展覧会やそれに関係する講演会等の中止、入場者減は致し方ないことであり、入場者数を論じても意味はないと思われます。学校等への出前授業等が6月下旬以降、それなりに開催できたのは、意義あることと思えます。

出前授業どのような形で実施されたのでしょうか。学校に出向いてですか、オンラインで開催された例などもあったのでしょうか。

(山田委員)

【回答】

基本的に出張授業を延期にするなどしました。中にはオンラインでの授業に切り替えて行った学校もあります。「土器づくり」の授業であったが、アイデアを練る授業は当館の所蔵作品を画面に見せ鑑賞することで、土器づくりのアイデアを想起できるようにしました。また、描きあがったスケッチを美術館側からも見られるようにして、評価やアドバイスを伝えることができました。

- コロナ禍のもとでの展覧会や教育普及事業で美しい作品にコロナ疲れを癒された来場者が多かったと思います。(高橋委員)

【回答】

コロナ禍において、美術館・博物館等の文化施設の存在意義が再認識されたという声が、新聞・インターネット等のメディアにも見られます。当館でも、この認識のもとに、展覧会開催期間を少しでも多くできるように努力し、あわせてリモートでの催事・情報発信を開拓しています。

- 11月から改修工事が実施されますが、いろいろな意味の点検、改修、見直しをする良い機会だと思います。(田代委員)

【回答】

このたびの改修工事では、空調設備を機能強化して、作品の保存と展示の環境をより良いものにする予定です。また、照明設備をLEDに代えた上で、展示室において調光機能(照度調整)を整え、調色機能を加える予定です。

- 収集方針の3点の柱によりそれぞれ何点の収集(比率)になっていますか。(樋口委員)

【回答】

令和2年度末時点での所蔵作品1,998点(資料等23点を除く)の内、収集方針別の点数・比率は次のとおりです。

1	個人作家作品	939点	47%
2	実用陶磁器	297点	15%
3	産業陶磁器	762点	38%

なお、実用陶磁器（作家による少量生産の実用の陶磁器）は、産業陶磁器（ブランド等による大量生産の陶磁器）に比べ、生産量が少なく、このことが上記の比率にも反映されていると考えられます。

○収集品の展示方針はどのようになっていますか。（樋口委員）

【回答】

収集した所蔵作品を展示するコレクション展の方針については、いくつかの観点から考えています。

まず、当館の収集方針を示し、その中の主だった作品を紹介していく展示を、近年は常時行うようにしています。「コレクション・ハイライト」のタイトルで、ギャラリー2のB室等で行っています。

次に、コレクション全体の中から、テーマを設けて一連の作品を紹介する展示も行っています。このテーマ展示を展開していく際には、ジャンル（伝統的なタイプと現代造形的なタイプ、日本と外国など）のバランスや、地元関係作家作品の紹介などを考慮しています。

○「大地のこどもたち 2020 展」は、約 30 日間でありながら多数が来館されたことは素晴らしい、反面幻の横浜焼、東京焼が低調と思うが、原因はどのような事と考えていますか。（樋口委員）

【回答】

「大地のこどもたち 2020 展」については出品された子どもたちの作品そのものに魅力があるということもありますが、出品した子の家族など親族、学校関係者などが多くの方が来館されます。また東濃地区だけでなく県内外の子ども達の作品も出品され、対象の範囲が広いことも来館者が多い原因であると考えます。

○毎年、教育普及事業をよく頑張ってもらっている。特に今後も出張授業を強化して頂きたいです。（樋口委員）

○企画展には全て参観させてもらったが特に「ルート・ブリュック」が良かった。大地の子供たち 2020 展は毎回素晴らしいが、搬入の時間が早い為に間に合わなかった学校もあったように思いますので、今後、国際陶磁器フェスティバルの開催年に行うのか教えてください。

（加納委員）

【回答】

国際陶磁器フェスティバルの開催年に関係なく3年に1回というスパンで開催しています。なお、学校現場が出品作品の確保に十分な時間をかけられるよう配慮します。

(3) 展覧会観覧者数・アンケートについて

○観覧者の率直な言葉が一番だと思います。(加藤委員)

レストランが充実するとよい。(加藤委員)

○「心を病んでいたのに元気が出た」という感想がとても印象に残りました。アートは理屈じゃなく楽しむものだと改めて思いました。

(安藤委員)

○コロナ禍での「来てよかった」「元気が出た」「また来たい」などという感想は、美術館に期待されるものを再認識させてくれます。私自身も、美術館ならではの質の高いサービス、空間や時間などについて、あらためて考えさせられる機会となりました。(神崎委員)

【回答】

アンケートには、当館の自然環境や建築についての好評もしばしば見受けられます。この好条件を生かした催事や広報も、当館の課題であり、そこにも事業の新展開の可能性があると考えています。

○来館者の性別年代別内訳ですが、やはり女性、しかも50代、60代が多いのは、当館の特徴だと思われます。もちろんそれ以外のファミリー世代、若者たちへのアプローチも必要であることは当然ですが熟年世代がメイン来館者層であることを認識し、こうした方々への満足度を上げる必要も感じます。

キャプションの文字が年齢もあってももう少し大きいと良いという要望が複数みられました。裏面にも模様のある作品は、鏡を置いて欲しいなど時間にゆとりのある熟年高齢者層ならでの、じっくり鑑賞したい傾向も伺えます。こうした年齢の高い方々向けへの配慮をさらに充実させるとさらに良い。(山田委員)

【回答】

高齢者層への配慮（掲示する文字の大きさ等）を求める声への対応も、重要な課題と考えています。作品を生かす展示空間づくりとのバランスを考慮しながら、展覧会ごとに具体的な方法を考えています。

また、高齢者も含めて、来館者に作品をじっくり鑑賞いただけるようにする工夫も重視しています。その対応の一つとして、作品を多角度から鑑賞するための、デジタル・ツールの導入も検討しています。

○コロナ禍ではありましたが、思った以上に多くの観覧者があり良かったと思います。企画の良さのみでなく、施設や職員の対応に良い評価がされていて嬉しく思います。(高橋委員)

○アンドリュー・ワイエスは少々人気がありますが、どの展覧会もほぼ同数の方が来館されているような気がします。しかし人数の少なさもコロナ禍での現象、一過性のものでしょうか。(田代委員)

○アンケート結果に基づいて改善された事を教えてください(樋口委員)

【回答】

明確な形を取った例としては、来館者への導線のためのサイン類があります。「順路が分かりにくい」等の意見への対応策です。美術館エリアの近くや内部に、床シールや吊り下げバナーによる、導きのサインを設置しました。

○アンケート結果をどのように評価していますか、活かせる事項はどのようなことがありましたか(樋口委員)

【回答】

アンケートの結果を評価するシステムは設けてはいません。しかし、アンケートの結果は、集計して、職員に回覧しています。クレームなどの問題視すべき意見や、至急の対応が必要な意見が寄せられた場合は、すぐに供覧します。

美術館の事業や運営に活かせる事項は、主に接客に関するものです。例えば、来館者スペースに関する改善要求(室温、音等に関する事)や、監視員・受付係員への苦情(言動等に関する事)などです。すぐに改善できることは、可能な範囲で対応しています(空調の調整、職員への注意など)。

展示に関する改善要求は、次回への継続課題にならざるを得ないことが多いです(作品の見せ方や、掲示物の文字等への要求)。

○高い技術に触れる事の素晴らしさがもっと多くの人に伝わると良いと思います。色々な視点での意見が多く自分では気づけない事をアンケートから読み取れました。このような意見をシェア出来ると皆が違った観点で楽しめる。(山口委員)

2. 令和3年度 事業計画について

- 「土に吹き込まれた命」は最終日に急いで訪れたのですが、再訪でき悔まれるほど素晴らしい展覧会でした。テーマの通り、どの作品も指先から生み出される命がいきいきとして動きだしそうでした。また、動物の持つ生命力、エネルギーまで伝わってくるようでした。そして動物も植物も人も、土に命を与えられている事を改めて認識し、掲示されている解説文にも感銘を受けました。令和3年度のこれからの展示会も楽しみです。(安藤委員)
- コロナ禍の収束までは安全で心安らぐ場が求められますので、安心して過ごせる静かで知的な施設として、美術館が周知されていくことを期待しています。春の展覧会は楽しく拝見させていただきました。今年度は10月までのようですので、新たな来館者の開拓を期待しています。(神崎委員)
- 石崎新館長をお迎えし、新しい試みも期待します。年度途中の11月からは改修工事が予定されています。LED化など鑑賞者にとっては有難いと思われれます。改修工事で休館中も出前授業などもコロナの感染状況を踏まえながらも積極的に取り組んで頂きたい。(山田委員)

【回答】

改修工事による休館中は、所蔵作品を県内の文化施設で展示する「サテライトミュージアム」を開催します。令和3年度は東濃地区、西濃地区、飛騨地区の3会場で、令和4年度は東濃地区、中濃地区、岐阜地区の3会場で開催します。会場ごとに、地区や施設の特徴も配慮して、テーマや展示内容を考えています。関連催事も行い、教育普及活動も展開するとともに、当館の認知度を高めることも目指しています。

- 国際陶磁器フェスティバルに関連した企画がないのは何故ですか。(加納委員)

【回答】

「国際陶磁器フェスティバル美濃」に関連して「台湾現代陶芸の力」展を開催しています。これは当館と新北市鶯歌陶瓷博物館との協定に基づく自主企画の展覧会です。フェスティバルに合わせて、充実した展示内容であるとともに、国際交流に力点を置いた第12回フェスティバルの趣旨にも沿うものです。

ちなみに、元は「丸沼芸術の森コレクション」展を充てていましたが、フェスティバルがコロナ禍で1年延期されたため、タイアップの展覧会が変更になりました。

- 令和3年度はどのような目標を持っていますか。
何か特筆すべき事項を教えてください。(樋口委員)

【回答】

当館の令和3年度の組織目標は、5つの目標を掲げています。

- 1 コレクション展・企画展による、来館者満足度の向上
- 2 設備・備品の整備による、収集作品保存と展示の機能向上
- 3 魅力発信事業等による、「ぶらり立ち寄る美術館」
- 4 教育機関との連携による、教育普及活動の推進
- 5 台湾等との交流による、海外との交流の展開

これらの内、特筆すべき事項は2、5です。具体的には、2では空調設備・照明設備の改修工事が、5では台湾展が、主な内容となっています。

3. 今後の美術館の運営について

- アートの世界も今後ますますジャンルによる境界線が取り払われ、様々な素材が混在した表現が広がっていくと思います。陶芸や土に関わる展覧会だけでなく、例えばテキスタイル、織物、紙、木や絵画など素材に関係なく影響を与え合っている作品を同時に見る事が出来たら来館者の年齢層も広がり、より興味を持って楽しめる。アンケートにもありましたが、もう少し回廊の活かし方がないでしょうか。また、回廊のポスターなどの掲示物が多すぎてあまり見る気がしないので広報に逆効果のような気がします。バスの本数が少ないのとバス停から美術館へ、さらに美術館についてから長い回廊を渡るのがお年寄りには大変です。美術館を訪れるのにミュージアムショップも魅力の一つです。企画展の関連グッズだけでなく、センスのいい文具や雑貨、アクセサリなども置かれているとよいのでは。アラビア釜やスージークーバーなどのビンテージの陶器を見つけた時は嬉しかったです。(安藤委員)

【回答】

駐車場からの回廊におけるポスター等の掲示は、改善の余地があると考えられます。回廊の活用は、基本的には公益財団法人セラミックパーク美濃が管轄しており、その一部であるアルコーブ（奥まった部分）の一つを、当館が管轄しています。財団と調整し、その改善を検討します。

なお、当館管轄のアルコーブは、平成28年度に、現在のようなポスター等掲示スペースに整備しました（以前は映像紹介コーナーで、機器の老朽化により整備）。当館と近隣の美術館・博物館の展覧会ポスターを掲示していますが、整備当初には、より多角的な運用の案もありましたので、より有効な運用を検討します。

- 来館者が期待する美術館ならではのサービスとは、館の成熟度による

と思います。美術館の間口は広く開放されていますが、「岐阜県現代陶芸美術館ならではのサービス」とは何なのか。改修期間もありますので、職員全員で話し合われてはいかがでしょうか。（神崎委員）

- マイカー以外の交通の便、バスなどの充実、せめて多治見駅からのシャトルバス、土岐のアウトレット行きのバスが当館にも寄るような形に出来ないものでしょうか

もう一つ感じるのはショップと飲食設備の充実です。せっかく鑑賞に来て頂いても、お土産を買うものがない、休憩に食事しようとしてもメニューが魅力なくては、当館に来たこと自体にがっかりしてしまうことになりかねません。（山田委員）

【回答】

バス等の利便性の向上は、以前から当館の課題です。平成30年度から令和元年度にかけて、公益財団法人セラミックパーク美濃、近隣の美術館と共に多治見市に陳情するなどしましたが、具体的な改善に至りませんでした。今後も検討すべき課題となっています。

ショップと飲食施設の充実も重要な課題です。公益財団法人セラミックパーク美濃が運営するショップと、当館の「友の会」が運営するショップがあります。前者は主に地元産業の商品を扱い、後者は所蔵作家や展覧会に関係したアイテムを扱うという役割分担をしています。前者のショップの内容は担当スタッフが企画し、後者の品揃えや商品開発は美術館職員が関わっています。いずれも、経営条件の点で問題がありますが、改善の余地はあります。

レストランも同財団が運営しており、よりお客様に満足いただけるような営業を検討していただきます。

- 改修工事後の再開が楽しみです。企画に期待します。
休館中のアウトリーチにも期待しています。（高橋委員）
- オンライン講演も良いが実物を見るという体験は何ものにも変えがたい。他の美術館から貸して戴ける物なら陶芸に限らず積極的に開催していただきたい。それも美術館を名乗る使命であると考えます。
（田代委員）

- コロナ感染症が収束していない中、安全安心な展覧会を開催し、多くの方々の来館を目指して下さい。特に地元の方々の来館を促す工夫を検討ください。（樋口委員）

【回答】

新型コロナウイルス感染症への対策は、大きな落ち度やクレームも無く、アンケートでも及第以上の評価をいただいています。今後も油断せず、これまでの対策を継続していきます。

来館を促す工夫に関しては、新しいデジタル系ツールも取り入れなが

ら、有効な方法を検討していきます。ただし、開館以来20年間、広報面では様々な方法を試行済みであり、予算面での改善が無ければ大きな進展は難しいといった面もあります。実際に出来ることは、管理業務専門職（監視スタッフ）を含めて、職員がリサーチと案出しを心がけ、地道な工夫を重ねることと考えられます。

○全国の陶芸美術館、世界の陶現美術館の企画・展覧会等の企画・展覧会等があれば興味深いです。（加納委員）

○オンラインは便利だが、現に利用する方は限られているので芸術が広がるには難しいと思います。若者にはSNSや話題性のあるものとのコラボで巻き込むと面白いのではないのでしょうか。（山口委員）

4. その他

○陶芸と一言で原点は土で、そして火でもって焼き上げる、その後感動がある。（加藤委員）

○教育機関との連携等に力を入れてもらう事で陶芸に興味を持つ人材を増やしていけると良い。（加納委員）

○陶芸以外の展と陶芸を上手に絡めた面白い展を期待しています。その時は近隣の美術館、博物館とあまり被らないようにしていただきたい。（長谷川委員）

【回答】

当館の展覧会と近隣の美術館・博物館とで展覧会が被らないようにする対策としては、美術館・博物館どうしの協会組織（岐阜県博物館協会、東濃西部陶磁資料館連携ネットワーク会議等）や、学芸系職員どうしのネットワークを通じて、これからも配慮していきます。

○コロナ禍が続き、また自粛となっても他はバーチャル美術館とかありますが、オンライン以外の方法で実物を鑑賞できる美術館に工夫して開館して欲しい。（長谷川委員）

○コロナ禍で音楽や舞台芸術が大変な痛手を受けました。そのような中で美術館は何とか対応できたのではないのでしょうか。アンドリュー・ワイエスと丸沼芸術の森コレクション展で「芸術は人にとって必要なもの」という芸術の森創始者の言葉が強く心に残りました。（高橋委員）

○セラミックバレー協議会では「from Mino」「to Mino」を実施していきたいとのことです。是非、現代陶芸美術館としても、実行、協力をお願いします。

国際陶磁器フェスティバルを美術館としても最大の協力イベントととらえ、相互協力により地域の発展に寄与していただきたい。

(樋口委員)